竹子、竜の護りを得たる語

だいせん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竹子、竜の護りを得たる語

【Ｎコード】
Ｎ８１０３Ｙ

【作者名】
だいせん

【あらすじ】
貴方がいらっしゃるようになってから、一体どれだけの月日が経ったのでしょうか。
毎夜通ってくる彼とただの一度も言葉を交わしたことは無い。
平安時代を舞台にしたファンタジー短篇小説。

一

貴方がいらっしゃるようになってから、一体どれだけの月日が経ったのでしょうか。

「三日後、宮中へ上がることになりました。」

御簾の外に声をかける。

・・・沈黙。応えは無い。それはいつものこと。

もう7年にはなろうか。毎夜通ってくる彼とただの一度も言葉を交わしたことは無い。

彼と出会ったのは八つの女童の頃。父様が部屋から眺められるようにと庭に池を作ってくださって間もなくの頃の事ではなかったろうか。毎日、毎日、昼となく夜となく庭の池をあきもせず眺める私に両親も女房達も呆れ顔だった。

・・・竹子様はお池に懸想されておる・・・

屋敷の者たちは皆、そう言ってからかった。そして、それはあながち的外れな見解とは言えなかった。

・・・あの池に心奪われていた・・・

何がそんなに私を惹きつけたのか。今でもよくわからない。

何の変哲もない人の手によって造られた池。殿上人の屋敷ならどこの屋敷にあったとしてもおかしくない。それはそんなに大きくも立派でもない代物だったのだ。

何故か惹きつけられる。

目が離せない。気が付けば池のほうばかり見ている自分がいた。

池を眺めるようになって幾日かすぎたある日、嵐が都を襲った。

それは稀に見る大きな嵐で、七十を過ぎたばあやもこんな大きなものは初めてだといっていたほどだった。
この嵐でお池がどうにかなってしまったらどうしよう。ふと思い立ち、女房達が止めるのもきかずに雨戸を開けて外に出た。

その時だった、
ピカッと空が光ったかと思うとザバンッという大きな水音がしたのだ。女房たちは悲鳴を上げ、すでに雨でずぶ濡れになっている私を屋敷の中に引きづり戻した。
「姫様、なんと無謀な！」
その手のお小言をひとしきり言った後、彼女たちは先ほどの光について話し始めた。
「すごい雷でしたわね。あんなに光って・・・」
そう、それは本当にまぶしく光った。でも雷とは私には思えなかった。
音がないのだ。
光の後には必ず音がついてくる。先ほどから音が鳴るのを待っていたが、一向にその気配がない。
あれは雷などではないわ。
そう言いかけたが女房達に急かされ、着替えさせられ、彼女達にそれを伝えることは叶わなかった。

二

そのことがあった次の夜からだ。彼が毎夜私のもとに現れるようになったのは。
彼は私が琴を弾き始めると決まって現れた。じっと御簾の外に座って音に耳を傾けている。

初めて会った夜。
曲を弾き終わり、ふと外に目をやると彼は今いるのと同じ場所にまるでそこにいるのが当たり前のように座っていた。あまりにも何気ない様子だったので、一瞬見逃しそうになるほどだった。普通なら声をあげて不審者がいると屋敷の人々に助けを求めるのだろうが、何故か大声を出す気にも、人を呼ぶ気にはなれなかった。
だが気づいていないふりも今更出来ず、声をかける。
「そこで何をしてらっしゃるのですか？」
返事はない。それから私達はこんな夜を7年近くも続けてきた。隣の部屋には世話役の女房達が控えている。この人が何か危害を加えようとしたところですぐに助けを呼べば大事には至らない。池を眺めることしか楽しみのない日々に退屈していた私は、そう高をくくってその不思議な存在を受け入れてしまったのだ。

毎日、毎日、毎日。琴を弾いていると彼はあらわれた。黙って静かに音に耳を傾けている。その静かな時間がとても居心地が良く、私はいつの間にか夜が待ち遠しいとさえ思うようになっていた。
そして幾晩も過ごすうち私はいくつかのことに気付いた。

一つは、彼が現れる前に必ず水音がすること。さらに1つは池に面した自室で琴を弾くときにしか現れないこと。別宅や旅先で彼が現れることは一度もなく、ただ私の部屋へのみ現れるのだった。
そして、あと一つ。
どうやら彼は私にしか見えていないということだ。
琴を弾くとき、大抵私は一人でいる。だが毎夜、毎夜、一人でいるわけではない。
ある晩、いつものように琴を弾いていると女房の一人が茶と菓子を持って部屋へと入ってきた。
満月の夜だった。

彼女は私に微笑みかけ、御簾ごしに外に目をやり
「良い夜ですね」
と言った。私はうなずきながら彼女と同じように外に目をやった。
鼓動が少し早くなる。
彼は・・・そこにいた。
彼女の視野の中に彼がいる場所があるはずなのに・・・。
「さっき物音がしたのだけど、何事もないかしら？」
私は思わず彼女に尋ねた。女房は首を傾げつつ御簾ごしに外を見渡した。
「まあ、野良猫でも入ってきたのかしら・・・？」
見えないのだ。
彼は彼女からも見える場所にいるのに、彼女の目にはその姿が映ってはいないらしい。
私にしか見えない。
今まで不思議だと思っていたその存在が、前よりもいっそう不可思議なものに思えた瞬間だった。

だが、だからといって彼との関係は変わりはしなかった。毎日とはいかなかったが、弾ける時間がとれる晩には必ず琴を奏で、彼はその音に静かに耳を傾けた。
くる日も、くる日も・・・

そして私は１５歳になり、三日後、宮中へ女官として召し上げられることになったのだ。
尚侍をされている叔母のもとでお勤めさせていただくことになっている。宮中へあがれば頻繁にこの屋敷には戻っては来れない。
・・・彼にも会えなくなる。
そんな思いが頭をよぎり、居ても立ってもいられず、７年ぶりに彼に声をかけたのだった。

三

宮中へ上がることを告げたあとの沈黙の中。私は後悔の気持ちに苛まれていた。あの方が応えてくれるはずもないと分かっていたのに、言葉をかけてくれるのではないかと期待した自分に腹が立った。
夜が更ける。
私はため息と共に席を立ち、寝所へと向かった。

次の日も彼はいつもと変わらない様子で私の事に耳を傾けていた。昨日話したことをわかっているのか、いないのか。私には判断がつかなかったが、今日もやって来たという事実に私は心が暖かくなる思いがした。

実際、昨日そのことを告げたのは私にとっては賭けだった。その話をすれば彼が表れなくなるのではないかと考えたからだ。黙っていればあと数日、彼との時間を確実に持つことができる。
だが、宮中に上がる日が近づくにつれて、話さなければという思いが募っていった。
そして昨日、私はついに彼に話しかけた。

明日の朝にはここを発たねばならない。
今晩の曲を弾き終わり、私は立ち上がり御簾の外を窺う。思いがけず彼が御簾の正面に立っていた。私は目を見開いて息を呑んだ。御簾の隙間から白く細い骨ばった手が差し込まれる。
その手には青緑色の透き通った平たく丸いものが置かれていた。
それは大変美しく、光りさえ放っているかのように見えた。
「きれいね・・。これを私に？」
差し出された手からあの方の顔に目を向ける。近くにいるのに御簾

越しのために顔ははっきりとは見えなかった。
すうっという息づかいが聞こえたかと思うと明瞭な声が今息を吸ったその口から発せられた。
「あなたがここを去られる前にお渡ししたかったのです。私からの感謝の印です。」
「感謝？」
「そう、あなたの琴の音のおかげで私は大分よくなった。」
彼のもう片方の手も部屋の中に入ってくる。その手で私の手をとり、先ほどの丸い平らな何かを私に握らせた。

「これは私の一部。何か困ったことがある時にはあなたの手助けをしてくれるはずです。」
私は訳がわからず混乱していた。今まで一度も話したことのなかった彼と話をして、その彼に手をとられ何故か感謝されている。全てがあまりにも唐突で、私は焦りと驚き、困惑の表情を浮かべることしかできないでいる。
「私は何もしてはいません。」
ようやく出たのは、その一言だけ。
「7年前の嵐の夜、私はひどい傷を負ってこの屋敷の池に落ちてしまったのです。怪我には楽の音が良く効く。あなたの弾かれる琴の音が瀕死の重傷を負っていた私を7年かけて元の場所に戻ることが出来るほどに回復させてくれました。」
「元の場所？」
彼はうなずくと
「あなたが明日ここを経たれるように、私もまた今晩ここを去ろうと思います。」
長居しすぎました。と彼は言い、もう一度礼の言葉を言って、私の手を離すとくるりと向きを変えた。池のほうへと静かに歩みを進める。

行ってしまう。
私は御簾を跳ね上げ廊下へと飛び出した。
彼はもう庭に下りていた。私が追って来たのがわかったのだろう、彼は少しこちらに顔をむけると
「最後に池の水をいただくことになるのを許してください。元の場所に戻るにはどうしても必要なのです。」
申し訳なさそうにそう言うと、何の躊躇いもなく池の中へと入ってゆく。
「待ってくださいっ」
私もその後へと続く。彼は池の真ん中まで行くとこちらを向いた。胸の辺りまで水に浸かり、暗くて良く見えないが僅かに微笑んでいる様子だ。
「またどこかでお会いすることもございましょう。」
そう彼が言ったときだった、ごうっという音がしたかと思うと水が彼のいるあたりを中心に渦を巻きまるで天へと吸い上げられるように上へ上へと水柱を作った。私は呆然とその不思議な光景を見つめ、そしてハッとした。
竜だ。
水柱をまるで滝を登るかのごとく一匹の竜が昇って行く。
それは物語で聞くような大きなものではなく、大蛇と呼ばれる類の蛇と同じくらいの大きさであるようだった。竜の姿が小さく、小さくなってゆく。見えなくなってしまい、池の水が全て空へと昇ってしまうと今度は雨が降り始めた。
先ほどの池の水に違いない。自分でも意外なほどあっさりとそう結論付けると、空になってしまった池の中で、天を見上げたまま雨が止むまで立ち尽くしていた。

そして次の日、私は宮中へと上がったのだった。

四

気だるそうな足音をさせて、初老の公達が宴の席へと向かっていた。その後ろにはまだ宮中に上がるようになって間もない歳若い公達が少し緊張した面持ちで付き従っている。

「面倒だ」

前を行くほうの男が苦々しく顔をゆがめ、そう言い放った。もう宴は始まっており、二人の周囲には誰もいない。

「師匠。帝がせっかくお誘いくださったのに、そのような言い様をなさっては・・・」

慌てた様子で若い公達が嗜める。

「あの方は私にお遊びの占いをさせたいだけだ。司とて本当はこのような余興は好まないのだろう」

意地悪な目つきで司と呼ばれた公達のほうを見やる。確かに自分もあまり乗り気ではない。

「面倒だ」

今日、六回目だ。何度となく聞いたその言葉に司は少々うんざりしながら師匠の後に付き従って歩く。

その時だった。

司は清清しい気配を感じてハッとした。その気配のほうへ目をやる。

次の瞬間、師匠のほうもその気配に気づき

「ほう」

と驚いたような声をあげた。

「これは、これは。このように強い水の気配を持った人間を見たのは初めてだ。なんとも縁起が良い。あのような女官が宮中にいたと

は。」
彼らが目をとめたのは遠くの廊下を歩いていく女官のたちだった。顔などははっきりと見えないが、おそらく尚侍の一行だろう。師匠は一頻り感心したように彼女らを眺めてから、隣に立つ弟子を盗み見た。司はそれに気づかず、まだ彼女たちのほうを見ている。あのように遠い場所の気配を感じ取れるまでに成長したか。嬉しいような、寂しいような気持ちをふうっと息とともに吐き出し、
「さあ、もう行くぞ」
と司を促した。
そろそろ面倒くさい宴会の席へと向かわなければならない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8103y/

竹子、竜の護りを得たる語

2011年11月24日00時57分発行